

ダイテス領攻防記 7

登場人物紹介



『亡国』カズル

ダイテスの凄腕密偵。
精神に加護を持つ魔術師で、
幻影を使役できる。

ミハラ

ジュリアスの元学友。
儂げな美貌の持ち主で、
非常に頭が切れる。

ジュリアス

オウミ王国の王太子。
兄であるマティサを
心から慕っている。

ケイシ

西の小国カガノ出身。
オウミ王国の親衛隊に
所属する。

ナシエル

西南の国ランカナ出身。
ダイテス公爵家に
仕えている。

ティス

ミアーナと
マティサの息子。

ミアーナ

辺境の地ダイテス領の公爵夫人。
BLをこよなく愛している。
快適な暮らしと萌えを求め、
オーバーテクノロジーで
異世界を改革中。



みずたに みう 水谷美有

腐女子人生を謳歌していた
OL。事故で命を落とし、
ミアーナとして転生。

マティサ

オウミ王国の元王太子。
婿養子としてダイテスに
やって来て、公爵位を継いだ。
『黒の魔将軍』と
恐れられている。

目次

ダイテス領攻防記 7

乙女は夢を見る

263

7

ダイテス領攻防記 7

プロローグ 当代の魔女

大陸中央に位置するオウミは、北に竜骨と呼ばれる山脈を背負い、西はエチル、東はカイナン、南はハヤサという強国に囲まれている。

しかしエチル、カイナン、ハヤサの三国とは二年ほど前に同盟を結んでおり、ほぼ攻め込まれる恐れがない。また竜骨は越えることが不可能だと言われており、建国以来、北の方面からは何ものにも侵略されたことがなかった。

オウミの王都から北方の領地へ近づくにつれ、のどかな田園風景が広がっていく。申し訳程度に整備された道が通っているが、街道整備は各領地の領主に任されているため、地域によって差がある。

このあたりは荷車や馬車が通れるよう広い主街道が続いているものの、轍に踏まれていない部分には雑草がはこびる。畑の緑と道端の雑草、山々の森林が相まって、緑の絨毯を敷き詰めたかのようだ。

その主街道を、荷車でも馬車でもないモノが爆走していた。

あえて言えば、馬車に近いだろうか。

箱のようなもの下についた車輪が、ものすごい速さで回り続けている。馬車の轍に比べてあまりにも太い跡を土に刻みつつ、ソレは一路北を目指していた。

二台連なって走るソレには、馬が取りつけられていない。

もしこの世界にソレの正体を知る者がいれば、叫んでいただろう。

世界観を間違えていると――

やがて二台の乗りものは、北方の領地スエールに入った。

元は国の直轄領であったスエール。しかし小さな領地で、王家もこの土地に重きを置いていたわけではなく、他の辺境の直轄領と同様、整備はおざなりだった。

二年ほど前、男爵位を授かったコシス・カティラがスエールの領主となったが、街道の整備にはまだ手が回っていない。

スエール領を抜けてダイテス領に入ると、道は格段に整備されたものになる。

オウミ王国の最北端に位置する辺境の地――ダイテス領。領地を治めるダイテス公爵家の初代は、政権争いに敗れてこの地に追いやられた王族だった。

ダイテス領は、南の一部を除いた三方を、張り出した竜骨の一部に囲まれている。山脈に囲まれた、未開発のただ広い土地――流刑地がわりと言っても過言ではない。

当然、初代公爵を追いやった当時のオウミ国王もそのつもりだったのだろう。

ダイテス公爵家は、長らく目立たない、大人しい家だった。初代公爵が遺した謎の言葉――『ハニバル將軍はアルプスを越えてローマに大打撃を与えた。同じことをする人間がいまいとは限ら

ない。備えは怠るな』を理解できる子孫が生まれるまでは。

その子孫は、領内の塩湖から塩を生産しはじめた。それを皮切りに、農業や工業の画期的な技術も発達していき、ダイテス領はかつてより格段に豊かになりつつあった。

「やっと着いたわ！ すごい久しぶり」

世界観の間違った二台の乗りもの——自動車は、ダイテス領の玄関口セタ城に辿り着いた。助手席に乗っていたミリアーナは、ドアを開けて車から降りる。

前領主の娘であり、現領主の妻でもあるミリアーナ・ダイテス。彼女は、一児の母とは思えないほど若々しい姿をしている。小柄で童顔なのだ。長い黒髪に生き生きとした黒い瞳は、ミリアーナを実年齢より幼く見せる。

ミリアーナは後部座席のドアを開け、チャイルドシートのベルトを解いた。シートには、一人息子のティスが座っている。

まだ一歳のティスは黒い目を見開き、「あう」と首を傾げた。

瞳も髪も両親と同じ黒色だが、ティスの顔立ちも父方の祖父に似ており、両親のどちらとも似ていない。

「なんでこいつはびんぴんしているんだ？」

少し青い顔をした夫のマイイサが後部座席から降り、ミリアーナに尋ねる。

「小さい時から乗っているからじゃないですか？」

ミリアーナはしれつと答えて、ティスを抱き上げた。

ミリアーナの夫であるマイイサは、入り婿だ。

ミリアーナより四つ年上で、優れた武人。細身に見えるが、鍛えられた体躯。華やかな美貌に、明晰な頭脳。

ありえないほど、できすぎた婿である。

オウミ王ユティアスの長子で、『戦神の寵児』と謳われた元王太子がダイテスに来たのは、奇しくも初代ダイテス公爵と同じ理由——体のいい流刑だったのだ。

マイイサは王級、加護持ちである。

この世界には魔力があふれており、それを宿した人間は、加護持ちと呼ばれる。一方、精神に魔力を宿し不思議を操る者は魔術師という。

王級、加護持ちとはその名の通り、王になれるほどの強大な力を持つ者を指し、驚異的な身体能力を誇る。

だが王級、加護持ちとは、時に『キレた』と称される暴走状態に陥ることがある。

マイイサの母方の祖父は、かつてその暴走状態に陥り自国を滅ぼした。それ故に、実母リサーナは同じ王級、加護持ちであるマイイサを嫌い、廃嫡へと追い込んだ。

その後、オウミ王は廃嫡されたマイイサを中央政権から遠ざけるため、ダイテス公爵家へ婿養子に行かせたのだ。そのダイテスがとんでもない魔境になり果てているとは知らずに——

「お嬢様、お預かりしましょうか？」

もう一台の車から降り、その声をかけたのはカティラ男爵夫人クラリサだ。その胸には、一人息子のラクスを抱えている。

クラリサはもともとミリアーナの侍女だったが、縁あってコシス・カティラと結婚した。

ミリアーナとほぼ同時期に妊娠し、今はティスの乳母を務めている。

彼女は夫が領主を務めるスエールには戻らず、夫とともにダイテスまで来てくれた。その夫であるコシスは、もう一台の車の陰で青い顔をしている。マティサ同様、いまだに車酔いに悩まされているらしい。

マティサが廢嫡されダイテスに婿入りさせられた時、地位も家督もすべてを投げ打ってついてきたコシス。しかし、マティサが公爵家を継ぎ、独立騎兵隊の隊長として返り咲くと同時に、コシスも副官として軍に復帰した。その際、男爵位とともにスエールを賜ったのだ。

本来、カティラ男爵夫妻はスエールに帰るところなのだが、主と定めたダイテス公爵夫妻にそのままついてきた。

独立騎兵隊の任務が忙しく、領地の内政はミリアーナに任せっきりになっているマティサ。基本的に口出しはせず自由にさせているものの、やはり確認は必要である。そこで長期休暇を利用してしばらくは領地に滞在する予定だ。その間、もちろんカティラ男爵夫妻も滞在するつもりでいるらしい。

ミリアーナは、親友でもあるクラリサに向かってにっこりと笑った。

「大丈夫よ、クラリサだって二人も抱くのは大変でしょう。これくらいできるわ」

「——では、我々はこれで」

運転手がミリアーナに声をかける。荷物を下ろし終えたので、駐車場に車を停めに行くのだ。

「よろしくね」

以前なら自動車一台で事足りたが、ティスとラクスが加わったため、二台に分乗するようになった。そのうちの一台はカティラ男爵家に譲った車であり、コシスの紋章がついている。

また分乗にもない、専属の運転手をつけるようになった。

カティラ家の車にも運転手がついているのは、コシスがクラリサの運転をよしとしていないからだ。

以前から、身分ある女性がいれば御者のような役割をすることに異を唱えていたコシス。そのため、妻となったクラリサが車を運転することを快く思っていないのかもしれない。

決してクラリサの運転の荒さ——速さを追求するあまりリスキーなドライブテクニクを披露することが原因ではないだろうが——真実は闇の中だ。

ミリアーナは、我が子を抱いたまま振り返る。

その視線の先にあるセタ城は、シエル・オブ・キープと呼ばれる様式の城郭に似ている。これは、円形の城壁が天守を囲んでいるものだ。

しかし、その内部はミリアーナの知識により魔改造されている。

電氣を利用した灯り、蛇口をひねれば出てくる水、湯沸かし器によりいつでも使えるお湯。

この世界にあるはずがないこれらの品々は、ミリアーナによって作られた。

——ダイテス公爵家に生を受けたミリアーナには、前世の記憶がある。前世のミリアーナは水谷美有という名のOLで、不慮の事故により命を落としたのだ。美有の暮らしていた世界は、こちらの世界に比べて文明が進んでいた。その記憶を持つミリアーナにとって、この世界は暮らしにくい。

そこで前世の知識を頼りに、再現可能な技術とこの世界の魔力を組み合わせ、次々とハイブリッドを生み出した。

いまやダイテスは、数世紀分も進んだ文明の恩恵にあずかる魔境と化している。

ミリアーナがセタ城を眺めていると、一人の少女が駆け寄ってきた。

「ミリーちゃん、お帰りなさい」

「リオちゃん、ただいま」

リオ・ウシオは、東の大国カインの山中に捨てられていた少女だ。彼女もまた、ミリアーナと同じ転生者である。

リオがミリアーナにそつと囁いた。

「今日、新刊が出たわよ」

「あら、ちょうど今日なの？ 楽しみ」

ミリアーナが弾んだ声で答えると、クラリサも口を開いた。

「わたしにもお願ひします」

リオは、ミリアーナが趣味で作った編集部で小説のイラストや漫画を描いている。

写本しかないこの世界に印刷技術をもたらしたのは、もちろんミリアーナだ。この技術により、本を大量生産できるようになった。

販売はダイテス領内にとどまるが、城に勤める侍女や下働きの女性を中心に、その魅力に取りつかれる者が増え続けている。

ちなみにミリアーナたちが発行する本は、その大半がBL——同性愛をテーマにした作品である。

なぜならば、ミリアーナが腐女子だからだ。リオもまた同類である。作家、編集を務める者たちもしかり。むしろ読者も腐界の住人であった。

彼女たちは、立場を越えた友情で固く結ばれている。

「ところでリオちゃん」

「なあに、ミリーちゃん？」

「カズルさんと一足先に帰ったでしょう。その後、どうだった？」

カズル・ツナガはダイテスの密偵たちの教官をしており、ミリアーナの護衛任務もこなしている。だがその諜報能力を高く買われ、特別任務に就くことも多い。

先日、とある難しい任務を首尾よくこなしたカズルは、褒美として特別手当と長い有給休暇をもらったのだ。そして王都のダイテス領館に滞在していたリオとともに、先に領地へ帰ったのだが——

「相変わらずよ。小父様だったら、つれないんだからー」

リオはカズルによって命を救われ、以来、好意を抱いている——異性として。しかし十四歳のリ

オは、カズルの守備範囲外であるようだ。

「あく、やっぱりね」

リオはずっと好意を示しているが、カズルは涼しい顔でそれを受け流してきた。おそらく、幼児が『将来はお父さんと結婚する』と言うようなものだと思っっているのだろう。

「最近じゃ、夜になると避けられるのよ！ 昼間でも、はしたないって注意されることが増えたり！」

「あれ？」

リオの愚痴に、ミリアーナは引っかかるものを覚えた。

「それって、リオちゃんを女性として意識しはじめたってことじゃない？ そうでなかったら避ける必要はないはずよ」

ミリアーナの言葉に、リオは目を見開いた。

「そうよね！ 言われてみればそうだわ！ 一歩前進よねっ！」

リオは意気込んだが、ミリアーナにはそうは思えなかった。

確かにリオを女性として扱いはじめたのだろうが、カズルはその分、ちゃんと線引きするタイプのように思える。

子供が年頃になってきたから、扱いを変えたに過ぎないのではないか。あくまで養育する立場から。

二十ほど年が離れているリオを、カズルが恋愛対象として見ているとは到底思えない。むしろこ

れから区別される可能性が高そうだ。

（一歩進んで二歩下がったような……）

ミリアーナは、残酷な現実を友に突きつけることはできなかった。

リオからそっと視線を外し、明るくふるまう。

「さあ、お仕事頑張らなくっちゃね！」

——何はともあれ、ミリアーナはいろいろな意味で今生を謳歌しているのだった。

ダイテスの居城は、領地の最南端の街セタにある。唯一、領の外と接しているこの街は、ダイテスの玄関口と呼ばれている。

意外かもしれないが、セタの人口は領内でも少ない。これは、セタが外に向けての顔を作っているからだ。

他の街では当たり前に使われているオーバーテクノロジー。しかし技術の流出を防ぐため、セタではこの使用を制限している。自動車の保有は領主の関係者や役場の者にしか認められないし、汽車も通っていない。それでも上下水道は完備され、湯沸かし器も使えるので、他の領地に比べると生活は豊かなのだが。

そんなセタに作られた、領主城。この城の執務室は、マティサのために設えられたものである。しかし一年の大半を王都で過ごすマティサより、代行者が使用することのほうが多かった。

もちろん、ミリアーナのことだ。

「お酒の仕込みは、現在進行形でやっています。ものによっては数年がかりなので、急激な増産には対応しておりません。あらかじめ予測を立てて生産しています。よほどのことがない限り、品が不足するという事態は……ないはずなんです。正直、外国の反応が良すぎてまずいかもしれません」

せん

ダイテスへ戻ってきたミリアーナは、おねむなティスを寝かしつけてからクラリサに預け、マティサに領地の状況を説明していた。執務室には、コシスも控えている。

マティサは、ミリアーナの言葉に頷いた。

「カイナンとエチルだな。ぶらんでーというすきーか。あれは両方とも熟成に時間がかかるんだっ
たな」

カイナンとエチルの王たちは、以前ふるまったブランドーとウイスキーを気に入ってくれている。しかし、それだけではなく――

「果実を原料にしているお酒の類が他にはないということ。物珍しさからたくさんのお声がかかっています。スパークリングワインも人気ですね。ああいったものは、他じゃ作っていませんから」

三方を山に囲まれたダイテスは、山の傾斜を利用して果樹を育てている。そこから生産される果実を加工し、酒を醸造しているのだ。

「それから絹の販路を確保できたので、養蚕も順調に進めています。桑の生産もばっちりですし、来年度は規模を増やしてもかまわないかと」

「余裕があるならかまわん。嫁の判断でやっついでいい」

領地の収益が上がるのは、大事なことだ。

ミリアーナのもたらした知識の恩恵により、ダイテスは労働力にも余力があり、生産量を上げる

ことができる。

「穀物の生産も順調です。余剰分は加工品にして出荷していますから、問題ありません」

「上手くいっているようだな。精霊石はどうだ？ 動力源なんだろう？ 必要数は確保できているのか？」

「抜かりなく」

精霊石とは、魔力が宿った石のことである。自然の魔力を溜め込んだ石は、特定の現象を起こし続ける。たとえば氷の精霊石は、魔力が尽きるまで冷気を発する。ミリアーナはこの特性を活かし、冷蔵庫を生み出した。

他にもオーバーテクノロジーの多くは、精霊石で動いている。

ダイテスではさまざまなものを生産しており、それらについてもミリアーナが統治している。とはいえ、ダイテス公爵はマティサである。領地のことはすべて把握しておいてもらわなければならない。

その分、報告も複雑になり時間がかかるのだが、マティサは事情をきちんと理解しており、領地の運営に必要なものへの配慮ができる。

その点では理想的な夫であった。

ざっと報告を終え、ミリアーナとマティサ、コシスは一息入れることにした。

三人は、侍女が運んできた茶を口にする。

「そういえば、事後報告になっちゃいますが。領防衛軍のうち、公爵家の護衛組に新顔が入りまし

たので、後ほど挨拶させます」

「新顔？ 信用できる者か？」

当主であるマティサは、王級「加護持ち」でもあるため、護衛を必要としていない。

ダイテスの護衛が守るのは、主にミリアーナとティスである。

裏にはダイテス最強の密偵が護衛についているものの、それは表の護衛がいなくていい理由にはならない。

マティサの問いかけに、ミリアーナは視線を逸らした。

「信用できます。本人の手柄はもちろん、長くダイテス公爵家に仕えてくれている家系の出なんです。長年培った信頼と申しましょうか——」

「嫁、目を見て言え」

挙動がおかしくなったミリアーナに、マティサが詰問した。

「どういう問題があるんだ？」

ミリアーナは観念して白状した。

「……本来ティスの教育係にと考えていた人なんです、周りからの反対意見が多くて、お試して護衛に任命しました。問題がなければ、後々教育係にします」

マティサは眉をひそめた。

「反対意見が多かった理由は？ どこからのものだ？ また、そういう意見が多かったにもかかわらず、その者を推す理由は？」

護衛役の選出に反対意見が出るのは当たり前だ。重要な役職であればあるほど、誰を選んでも大なり小なり反発がある。

重要なのは、その理由、異を唱える者がどの陣営に属しているか、そして反発があっても推す理由の正当性だ。

「あく、本当に、本人の人格を含めて能力的にも問題はないんです。ただ、親戚筋に問題のある人物がいます……その人の部下から反対意見が続出しただけです。本人に咎がないのに、どうしようもないことで弾くのつて可哀想じゃないですか」

「ミリアーナの弁解に、マティサは額を押さえた。

「部下から反対意見が出るとか……相当だぞ……誰だ、それ？」

「ミリアーナは天を仰いだ。

「新入りを呼びますから、婿様が直接見極めてください。人伝の情報であだこうだ言うより、そのほうが納得できると思います」

——呼び出された新人は、中肉中背の二十代の青年だった。ふわふわの金髪に大きな碧眼。やや幼く見える顔立ちで、頬や鼻のあたりにうっすらそばかすがある。

「お呼びにより参上いたしました。どのような用件でありましょうか？」

「あなたを呼んだのは、婿様が帰ってきたからよ。あなたはティスの護衛なんだから、ちゃんと紹介しておいたほうがいいと思って」

ミリアーナは青年に声をかけてから、マティサを振り返った。

「ゆくゆくはティスの教育係になつてもらおうと思っている、エルンスト君です。今のところ、ティス専属の護衛です」

青年はマティサに礼を取った。

「エルンストと申します。一昨年まで騎士団に所属しておりましたが、除隊してダイテスに戻ってまいりました。このたびは重要なお役目を任せられ、光栄でございます。粉骨砕身、お仕える覚悟でございます」

次期当主の護衛は、ある意味一番大事な役目と言える。領地の未来がかかっているのだ。

「家名はどうした？ ないのか？」

マティサは、エルンストが家名を名乗っていないことを指摘した。

家名は、貴族やそれに準じた身分の者しか持たない。平民の出であればないが、士分を得た者なら家名があるはずだ。

マティサの言葉に、エルンストの顔が引きつった。

「じ、自分の家名は——」

青年は目を泳がせた。

「……アムールであります」

「……すまん、名乗りたくなかった理由がよくわかった」

マティサはエルンストの気持ちを察した。

ミリアーナが慌てて弁解する。

「婿様、アムール家はダイテス公爵家ができた時から仕えてくれている家系なんですよ。初代様が中央政権から遠ざけられ、だだっ広いだけの未開の地に封じられた時に、ついてきてくれたんですいわば、婿様にとつてのコシスのような存在だった人の子孫……もつとも、当代で今までの信用を地に落としましたけど！」

「何をやった、エドアルド！」

マティサは思わず突っ込んだ。

アムール家の当代といえば、ダイテス領防衛軍の長官エドアルド・アムールである。

ふわふわの金髪に大きな碧眼、小柄で童顔な年齢不詳の男。いろいろ優秀ではあるが、私生活が変態だった。

この世界において同性愛者であることはさほど問題ではないが、加虐趣味を持つ変態なのだ。マティサの疑問に答えたのは、ミリアーナである。

「主にセクハラですね。エドアルドは、普通顔で筋肉質の若い男の人が好みなんです。軍隊でこの条件に当てはまる人がどれだけいると思いますか？ さすがに部下を襲ったりはしませんけど、のぞきとか邪なお触り程度はあったみたいです。それが親愛による行為なのか、欲望丸出しの行為なのかは、区別——というより証明が難しいので、被害者は泣き寝入りするしかなかったみたいです。おかげで被害甚大というか……」

ミリアーナの言葉に、マティサが手で顔を覆った。

「せくはら……とは？」

「性的な嫌がらせのことです」

正しくは、セクシャルハラスメントと言う。

男同士でのぞきも何も無いと思うのだが、邪な感情を持ってガン見された上に興奮されたら不気味だろう。鼻息荒く筋肉を撫でられた日には、いろいろな意味で身の危険を感じたに違いない。

直接訴えることはできなかった被害者たちだが、拡散はできる。人伝に噂が流れ、防衛長官の性癖は公然の秘密となっている。

エドアルドはオープンな性格なので、それが噂の拡散に拍車をかけたのかもしれない。

きつと彼の先祖は草葉の陰で泣いている。

マティサは死んだ目をした。

「どこから反対意見が出たのか、理解した」

「理解していただけて幸いです。エドアルドはああですけど、エルンスト君はまともなんですよ。一族の中ではもつとも優秀ですし、跡継ぎも見込めるので次の当主にと望まれています。今回の件の反対意見は——まあ、熱い風評被害です」

ミリアーナの説明の間に、エルンストが膝をついた。そして頭を抱え、ぶつぶつと何やら呟く。目が死んでいた。

「冗談じゃない……ご当主様の跡なんて絶対継がない……養子になんかならないから……」

「あ、地雷踏んだ」

ミリアーナは、うっかりエルンストのトラウマに触れてしまったらしい。「俺は変態じゃない……なのになんで……あいつのせいだ……変態の養子は嫌だ……男を義母さんと呼ぶっておかしいだろう、当の本人は嫌そうな顔してるのに……いつそ本家が途絶えてしまえばいいんだ……アムールの名前なんて捨てたい……本気で捨てたい……むしろ、くたばれば変態……いつそ俺が……」

「ちょっと待て！ 言うてはならないことを口にしてるぞ！ 気を確かに持て！」

あらぬことを口走るエルンストに、マティサは彼の肩を掴んで揺さぶった。

「はっ！ 俺は一体何を……」

エルンストは正気に返ったようだった。

「すまなかった。とにかく、落ち着け」

マティサはエルンストを宥めた。放っておいたら、起きてはならないことが本当に起きそうだ。

エルンストは、姿勢を正した。

「は、はい。申し訳ありません。お見苦しいところを」

エルンストは、エドアルドの養子にと望まれているらしい。

エドアルドが子をなすつもりがない以上、家を存続させるには養子を取るしかない。血族のうち優秀な者を望むのは当然のことだろうが——途中おかしな部分があったのは気のせいだろうか。

エドアルドが義母さんと呼べと言ったのは、自分のことではないに違いない。本人がそれを嫌がっているという言葉からも、誰のことなのか予測がつく。

エドアルドは、カズル同様ダイテスの優秀な密偵として暗躍する『早風』に執心している。もっとも、『早風』セイは心底それを嫌がっているのだが。

エルンストは頭を下げて弁明した。

「すみません。ここ数年は落ち着いているんですが、それまでの印象が強くて……アムール一族の者だと知られると引かれます。その、まあ、いろいろとあつたんです」

マティサはミリアーナを見た。

ミリアーナはゆっくりと首を横に振る。

二人は、エルンストに言えなかった。

エドアルドがここ数年落ち着いている理由とは、被害が一点に集中しただけだと。

もちろん、その被害を受けているのは、セイだ。

特徴を挙げることができないほど、特徴のない顔立ち。ありふれた茶色の髪と瞳。細身に見えるが、実は筋肉質の逞しい体。どこまでもまっとうな精神。

セイは、もろにエドアルドの好みだったのだ。

セイに夢中になったエドアルドは、職場でセクハラをしなくなった。そのあふれんばかりの想い（欲望ともいう）をセイ一人にぶつけている。

セイは犠牲となったのだ。

「……苦勞してきたのは、よくわかった。苦難を乗り越えてきた貴殿であれば、この試用を見事こなし、本分をまっとうしてくれるものと確信している」

マティサはエルンストを励ました。

「ミリアーナも、遠い目をして口を開く。

「そうね。人は乗り越えたものが大きければ大きいほど、成長するのよ。きつとさらに成長してくると信じてる」

エルンストが成長をしたがっているかどうかは、この際置いておく。そして、苦勞の元凶（げんこう）に関しては見ないふりをする。手の出しようがないから。

エドアルドが優秀な防衛長官であることは間違いない。彼の画策（かくさく）があつたからこそ、ダイテスはセイという優れた手駒（てこま）を得ることができた。カズルを得ることができたのも、エドアルドのおかげだ。

その陰で犠牲になつた者には、哀悼（あいとう）の意を捧げる。他にできることはない。何事にも、犠牲はつきものなのであつた。

ティスの未来の教育係エルンストの挨拶（あいさつ）が済み、彼は執務室を後にした。

その後、マティサはミリアーナに尋ねる。

「——で、実際のところどうなんだ？」

「エドアルドは彼を跡継ぎにするつもりですね。一族からの賛同も取り付け、根回しに入ってます。エドアルドの跡を継ぐには、どうしてもアムール本家に入る必要があるので……本人は抵抗してまずけど、逃げられないでしょうね」

ミリアーナはそつと目頭（めがしら）を押さえた。

「そうか……優秀な者が入ってくるのは喜ばしいことだが……」

マティサの声には悲哀（ひあい）が漂（た）っている。

そう、何事にも犠牲はつきものなのであつた。

「気を取り直して、執務を再開するぞ」

「心得ました。まずは領内のことですが——」

こうして、領主夫妻は再び仕事に取りかかった。

「予定していた仕事はこれで終わりです。婿様は、休み明けまでセタ城に滞在しますか？」

「いや、できれば直接足を運びたいところがある。明日はまだここでの仕事が残っているが、明後日（あさって）ぐらいには行きたいと思っている」

「どこですか？」

マティサは、書類を指し示しながら言った。

「ここここ。ここもな。それから、ここには必ず行きたい」

「演習場ですか？ 理由をお聞きしても？」

ミリアーナが尋ねると、マティサは険しい目（げん）で答える。

「新型の火薬武器を作らせただろうが。あと、乗りものでせつじょうしゃとかいうものがあるそっだな？」

ミリアーナは顔を引きつらせた。

「……見たいんですか？ 武器の仕様は報告書に載せたはずですが。それに、雪上車は雪がないと真価がわからないと思います。今の季節、雪はありませんよ。それこそ、竜骨の上のほうの万年雪ぐらいしか……」

マティサは不機嫌そうに頬杖をつく。

「紙面上の数字を見ても、火薬武器の威力は実感できん。あれは今までなかったものだから、想像の範疇を超えている。この目で見たほうがいい。せつじょうしやは残念だが、外見だけでも見せる」

この世界——少なくとも大陸中央において、火薬武器を保有しているのはダイテスのみ。

ミリアーナの記憶によると、前世の世界における中世末期にはいわゆる火縄銃が誕生していた。銃の誕生により装備が変わり戦術も変わったが、この世界では戦場の華がいまだ騎馬である。

そんな中、ミリアーナの知識により一足飛びに機関銃が作られた。武器の中から機関銃を採用したのは、容易に領外へ持ち出せないようにするためである。

しかしマティサを婿に迎えて以降、身の危険を感じる出来事が多々あり、ミリアーナは持ち運びができる小型銃からサブマシンガンまで幅広く製造した。

いつ火の粉が飛んでくるかわからない以上、備えは必要である。

それに付随した戦術をエドアルドに教えているのだが、その演習はダイテスの奥深く——竜骨のふもと付近にある演習場で行われているため、マティサは知らない。

ミリアーナは、小さく息を吐き出した。

「……見学できるように手配します。独立騎兵隊の婿様には、不要な知識ですけど」

マティサは独立騎兵隊を率いる将である。万が一、戦へ行くことになれば、ダイテスの外にある戦力で戦わなければならない。火器を使った戦術はそれ以前のものとは異なるため、むしろその知識は邪魔になるだろう。マティサも、あえてそれを知ろうとはしなかった。

しかし彼がダイテスの当主となった今、知る必要もある。

「私も気になる話を聞いたので、確認ついでに視察へ行くのはやぶさかじゃありません」

「なんだ？」

「少し前、フィールのワイズ殿下と商売をしたのは知っていますよね？」

「もちろんだ」

以前、東の海洋国フィールの王太子ワイズが王都のダイテス領館を訪れた。ワイズは、ハヤサの第一王女タヴィナの夫である。

久方ぶりにハヤサを訪問したワイズは、舅のナリス王からダイテスのことを小耳にはさみ、興味を持ったのだという。

身分を隠し、お忍びでダイテス領館を訪れたワイズ。彼とは、いろいろと有意義な取引をした。

その際、取引のおまけとして、フィールの知る世界情勢——手に入りにくい竜骨の裏側の情報をさりげなく教えてくれたのだ。

竜骨の裏にも大小様々な国があり、中でも大きな勢力を誇っているのが帝国である。

フィールは多くの国と交易を行っており、帝国はお得意様の一つらしい。しかしワイズの言葉の端々から、帝国に対する警戒が見えた。あからさまではないものの、情報を伝えつつ、こちらの警戒心を掻き立てているようだった。

海洋国フィールの情報網は広く、帝国にとどまらず、その周辺国の情報にまで及んでいた。知らなかった大陸の北半分の情報をいろいろと手に入れ、ミリアーナには思うところがあった。

「——竜骨の近くに行つたからといって、どうなるわけでもないんですが、少しばかり帝国の動きが気になりました。演習場近くの城に駐屯している部隊と、情報のすり合わせをしたいんです」
「大陸の北側の情報か……貴重だな。オウミにとっては、未知の領域だ。情報源は伏せるから、こちらにも開示してくれ」

マティサは、ミリアーナに情報の共有を求めた。各領主が握る情報を、国がすべて把握しているわけではない。独立騎兵隊の隊長として、知っておきたいということだろう。

もちろん、お忍びで訪問したフィールの王太子ワイズが情報源であることは、伏せなければならぬ。

「いいですよ。たぶん、婿様が気になっている情報も含まれているはずですよ。知りたくないですか？ 帝国の侵攻状況。後日、詳しい話をしましょう」

ミリアーナはそう締めくくって、執務室を後にした。



ミリアーナが視察に行くとなれば、護衛であるセイとカズルも当然ついていかなければならない。二人の上司エドアルドに話を通しておく必要があるし、当事者二人の準備もある。

ミリアーナは防衛軍に視察の話をして、あちこちに連絡を回してもらった。

そこらへんの報告は電話一本で事足りるが、直接足を運ぶべき場所もあった。

「——というわけで、明後日から視察に出かけるから、またカズルさんを借りるわね」

「わかったわ、ミリーちゃん」

リオはあっさりと了承した。

リオの面倒はカズルが見ている。そのためリオは、昼はセタ城にいるが、夜にはカズルの屋敷に帰る。ただ屋敷には住み込みの使用人がおらず、カズルが不在の時はリオ一人になってしまう。そのため、カズルが任務でダイテスを離れる時にはリオを城で預かっているのだ。

「いい加減、カズルさんも住み込みの使用人とか護衛を雇えばいいのに。それくらいのお給料は渡してはるはずなんだけどなあ」

ミリアーナの言葉に、リオは手を横に振って答える。

「あ、それ駄目。小父様、他人を信用できないみたい。そもそも自分には分不相応だって、屋敷を所有していること自体に難色を示しているのよ」

「あー、カズルさん、そっちの道のプロだもんね。他人に対する猜疑心は強いほうなんだ」

カズルはダイテスの生まれではなく、生国はずいぶん前に滅んでいるという。

流しの雇われ密偵をしていた彼についた二つ名は、『亡国のカズル』。

その後、ダイテスに仕えるようになったため屋敷を与えたのだが——大事なものは屋敷に保管せず、通いの使用人にも清掃や食事の支度ぐらいしか要求しない。そもそも仕事中毒のカズルは、セタ城に泊まり込むことも多い。

リオを拾ったことで家族とも言える存在ができたのだから、多少なりとも改善すべきだとミリアーナは思うのだが、カズルの態度は相変わらずのようだ。

「わたしももう十四だし、家事ぐらい自分でできるわよ。むしろ小父様が不在の時にお城で寝泊まりさせてもらうのが心苦しいぐらいだわ」

胸を張って言うリオに、ミリアーナは眉をひそめた。

「未成年が何を言う。中身がプラス二十二歳でも、今のあなたは少女なんだから駄目。というか、一人で暮らすなんて物騒だわ。ここは平和な日本じゃないのよ。十四歳で一人暮らしなんて許可できませーん」

ダイテスは比較的治安がいいが、やはり平成の日本と比べれば危険がともなう。

カズルの屋敷はそれなりに立派なので、金銭目当ての賊が入り込む可能性だってある。

「それに、城にいる時は原稿やっているんでしょ？」

「うん。小父様の目がないから、原稿がはかどるわ」

放任主義に見えるカズルだが、ある一点においては厳しい。

カズルはリオがBL漫画を描くことを許していない。

彼女が原稿に書く台詞はすべて日本語なので、カズルは読めないはずだ。しかし漫画の場合、台詞が読めなくとも何をしているのかわかる。

リオに限らず、原稿が見つかるや焼却処分されるため、BL作品の書き手たちはカズルから原稿を隠す。

それは厳しい戦いだった。

なぜなら、カズルは精神に加護を持つ魔術師。幻を作り出し使役することで、情報を集めることができる。

実体を持たない幻はどこにでも入り込み、カズルの目となり耳となる。

カズルの“眼”から逃れるため、セタ城内にある編集部およびミリアーナの仕事部屋には呪陣を刻み、カズルの幻を弾いている。

この戦いはまだ終わりが見えない。おそらくカズルが諦めた時に、戦いは終了するだろう。BLの書き手が創作活動をやめるということは、ありえないのだ。

「小父様は衆道を嗜まないこともないと明言しているのに、なんでBLは駄目なのかしら？」
リオは首を傾げる。

「世の中には、BLを許せる人と、許せない人がいるのよ」

ミリアーナはふっと遠い目をした。

ミリアーナがBLを書いていることはマティサも知っているが、彼はそれを黙認している。

あまつさえ、ネタにしても怒らない。ただし、内容にもよるのだが。

あまりに過激なものはNGだが、加減を間違えなければ見逃してもらえる。

「まあ、子供に見えるリオちゃんが濃厚なBLを描くのが許せないんでしょうね」

「小父様、過保護おとおお！ わたし、もう子供じゃないのにいいいい！」

そう叫ぶリオの外見は、まごうことなき子供だった。

「こうなったら女子力をアピールして、小父様に一人前の女として見てもらうしかっ！ 料理だって掃除だって洗濯だって、一人でできるんだもん！ 小父様に認めさせてみせるわっ！ それで、お家で堂々と原稿を描きたい！」

「あ、多分、それ無理」

即座に否定したミアーナに、リオは絶望的な顔をした。

確かにリオは一通りの家事をこなせるが、それでカズルが認識を改めるかどうかは難しいところだ。

なぜなら――

「リオちゃんが料理できること、カズルさんはすでに知っているでしょ？ 前、一緒に料理を作ったじゃない。それでも、子供扱いするのよ。家事ができるからって一人前扱いするとは思えないわ。それに、BLって駄目な人は駄目だし。カズルさんは衆道を嗜しゅどうんでも、それを小説や漫画にするのは許せない人なんじゃないかな？ リオちゃん以外が書いた本も駄目なわけだし。二重の意味で無理よ」

そもそも家族の前で堂々とBL原稿が書けるようになったら、大事な何かをなくすと思う。あれ

はこっそり書くべきものだ。

ミアーナの指摘に、リオが膝から崩れ落ちた。

「ひ、否定できる要素がないっ！ 駄目なの？ 小父様、BL駄目な人？」

「そんなあ」と喚なげくリオに、ミアーナは遠い目をした。

「世の中にはそれを許せる人と、どうしても生理的に受けつけない人がいるのよ」

第二章 輪を回すもの

マテイサが希望した領地の視察は、二日後に実現した。

早朝にセタ城を出て、ダインまで車で移動する。ダインは、セタからもっとも近い「駅」がある街だ。そこからは汽車の旅となる。

オウミの他の領地に比べると、セタでの暮らしは驚くほど便利に感じられる。だが、ダインはさらに別世界である。

この街では、移動手段として自動車や汽車、バスが普通に使われている。

自動車は長い距離でもあつという間に走り抜け、汽車は驚くほどの速さで多くの人や荷物を運ぶ。街中の道は車で走れることを前提に整備されており、清掃も行き届いている。また精霊石による街灯が設置され、夜でも出歩けるほどだ。

そんなダインの街で暮らす領民たちは、加工業や運搬業、商業に関わる仕事に就く者が多い。

暮らしにも余裕があり、上等な服に身を包んだ民が街を行き交っている。

ダインに到着したミリアーナー一行は、汽車に乗り込むなり個室へ移動し、視察日程の確認をはじめた。

「婿様が視察を希望した場所には、お渡しした日程表通りに移動するつもりです。今回はティスト

ラクスがいるので、同伴者の人数も多いんですけど、実際に見学をして話を聞くのは婿様とコシス、私ぐらいなものですね」

残りは、世話役と護衛である。

赤ん坊二人の面倒は主にクラリサが見ており、他にも世話役の女性が三人ほどついている。またエルンストを含む十二人の専属護衛が周囲を固めていた。

陰からは、セイとカズルも護衛についているはずだ。

カズルは、背が高く体格もいい。理知的で気品のある顔立ちをしていて、口髭を蓄えている。はつきり言って目立つ容姿なのだが、幻術を使えば他者の認識を攪乱できるため、問題ない。仮に目と鼻の先に立っていても、そこにいると認識できないのだ。

セイは普通の格好さえしていれば、ナチョラルに周りに溶け込んで見つけづらい。特徴のない天性のモブ顔。

究極の普通顔、すごい。

「……今、疑問に思ったんだけど、コシスってうちを退職しているのよね？」

現在、休暇中のコシス。それなのに、当然のような顔をしてマテイサの隣に座っている。

いまやそれが当たり前の光景になっているのだが——慣れって怖い。

銀髪の男爵は涼しい顔で言った。

「さようにございます。軍へ復帰するにあたり、他家に仕えているわけにはいきませんでしたのわ」

「それなのに、なぜ今、当然のような顔をしてここにいるのかしら？」

ダイテス公爵であるマティサが軍の休みを利用し、己が領地で内政に励むのはおかしくない。むしろ当然である。

しかし、現在休暇中であるコシスがマティサの補佐をするのはおかしい。そもそも自分の領地で果たすべき役割があるはずだ。

眉を寄せるミリアーナに、コシスは淡々と答える。

「お方様、我が君の伴侶の座はお方様のものですが、その腹心の座を明け渡すつもりはございません」

「ブレないわね。揺るぎなき忠誠心……」

とはいえ、雇われているわけでもないのに他領の領主が内政に関わってくるのは、いかがなものか――

「諦めろ、嫁。俺は諦めた。四年前にな」

マティサの言葉に、ミリアーナは首を傾げた。

「四年前って、私たちが結婚した年ですよ？　もしかして婿様、ダイテスに来る時、王都に残るようコシスを説得したんですか？」

マティサは不機嫌そうに頬杖をついた。

「当たり前だ。あの時はダイテスがどんな場所かもわからず、それまで築いてきたものすべてを捨てるようなものだったんだぞ？　考え直すよう言うに決まっている」

当時、コシスは子爵であり、王太子親衛隊の隊長でもあったのだ。エリートコースを進んでおり、周囲からもその技量を認められていた。

「婿様の言葉をきかなかったんですね」

「お方様、わたくしのすべては我が君のためにございます。我が君から離れるなど、許されるべきことではありません」

忠臣は、どこまでも揺るぎなかった。

「〳〵お前以外に、親衛隊を任せられる者はいなかったんだがなあ……」

マティサがぼやく。

どうせ数年も経てば、マティサはダイテスから王都に呼び戻されていただろう。

オウミに、王級「加護持ち」を遊ばせておく余裕などない。

その間、隊をまとめていてほしかったとマティサは思う。

コシスがダイテスについてきたため、王都で王妃派の動きを抑えることができず、エチルへの侵攻を許してしまった。その結果、オウミは大敗。

もっとも、それがきっかけでマティサが思いのほか早く表舞台に呼び出されたのだから、運命とは皮肉なものだ。

ミリアーナは、むうつと眉を寄せて呟く。

「あんまりダイテスを優先させるのは、クラリサが可哀想だわ」

「ご安心ください。妻もわたしと同類です、お方様」

コシスが即答した。

「……そうだった……」

クラリサは、両親にすすめられた縁談が嫌でダイテスの侍女募集に飛びついた。

勤めはじめたばかりの頃から気のきく良い子だったが、ミリアーナと気が合い、今では立場を越えた親友でもある。

以前は「お嬢様に一生お仕えする」と婚期など無視していたが、縁あってコシスと結婚した後も、ティスの乳母として仕えてくれている。

「コシスとクラリサって、なるべくして夫婦になったのね……」

とにかく、いろいろとタイミングも良かった。

縁とは異なるものである。



ミリアーナは、ティスとラクスも連れて最初の視察先へ向かった。まずは果樹園とワイナリーを見学する。

桑畑と養蚕場、絹の生産工場、缶詰をはじめとする保存食の製造工場などを回る予定となっている。

これらは、ダイテスの経済を支える大事な産業だ。

果樹園に到着したミリアーナたちは、農用トラックに分乗して広い敷地の見学を開始した。

トラックは低速で進む。

葡萄棚が珍しいのか、ティスははしゃいだ声を上げて、葡萄の蔓に向かって手を伸ばしている。

葡萄の開花時期は初夏で、夏の終わり頃から秋に収穫期を迎える。

花は終わったが、収穫まではまだ遠い。

茂った葉が日光を浴び、地面に影を落としていた。風で葉が揺れるたび、木漏れ日がきらきらと瞬く。

袋掛けされた葡萄の実は成長途中だ。じっくりと手をかけて大事にされている。

「うん、良い感じかな」

ダイテスの農業には、この世界にはない農法と農耕機械が取り入れられている。もちろん、これらはミリアーナによってもたらされたものだ。

作業効率が格段に上がり、収穫量も増えて質も良くなった。人手にも時間にも余裕ができ、加工業に人を回すことができる。

「今年も、葡萄は良い塩梅です。美味しいワインができやすよ」

トラックを運転する農夫がのんびりと言う。

「そいつは何よりだ」

マティサが頬を緩ませた。

「婿様、飲みたいの？」

「ん？ 美味いワインは嫌いじゃないぜ？ まあ、新酒より寝かせたワインのほうが好きだがな」
「熟成させたほうがいいってことですな」

通常のワインは、熟成させたほうが美味しくなる。

ただ、すぐに飲みたい人のため作ったワインもある。この新酒は、いつも頑張ってくれているダイテス領民へのご褒美のようなものだ。

新酒は飲みやすく口当たりも良いが、熟成させるとまずくなるので、三ヶ月ほどで飲んでしまったほうがいい。そのため、領外へは売り出していない。

このような特殊な例を除き、酒はダイテスの主力商品の一つだ。

ウイスキーやブランデーに加え、通常のワインからスパークリングワインまで、どれもよく売れている。

どこまでも続く葡萄棚を眺めながら、ミリアーナは目を細めた。

作業をしていた農夫が、視察中の領主一家に気づいて頭を下げる。その顔は明るく、晴れ晴れとしていた。

「……のどかね。ついそこに危機があることなんて、忘れてしまいそうだな」

ミリアーナは、小さな声でひとりごちた。

果樹園とワイナリーを見学したミリアーナたちは、次の視察先へ向かった。

絹の生産工場や缶詰の製造工場などを回り、最後は雪上車の保管所へ。保管所は竜骨の中腹にあ

るので、ロープウェイを利用する。

「雪上車には二種類あるんですよ。スノーモービルという、いわば原動力を積んだソリのようなものと、キャタピラを備えた本格的なものです。これから向かう場所には、両方とも保管されます」

建物の前までやってくると、ミリアーナはセイとカズルに声をかけた。

「セイ君、カズルさん、ここからはセキュリティの問題があるから姿を見せてくれないかしら？」

次の瞬間、二人が姿を現す。

控えていた護衛たちの中には、驚いたように飛び上がる者もいた。

「どうしたの？」

ミリアーナは手近な護衛に聞いてみた。

「も、申し訳ございません。話には聞いていましたが……このように突然現れるとは……そこにいたことなど、まったく気づきませんでした」

護衛は己の不覚を恥じているようだ。

「気にしないで。カズルさんがそういう能力を使っているのだから」

相手の認識を攪乱させるとい術は、敵に回すと本当に厄介だ。

流しの密偵時代、カズルは暗殺し放題だったことだろう。本人にも護衛にも気づかれず接近し、サクツと殺して悠々と逃げられたはずだ。

いわば目に見えない暗殺者。



その気になれば、カズルは王級「加護持ち」でも暗殺できるだろう。

偶然とはいえ、カズルを手に入れられた奇跡に感謝したい。

どこか芝居がかった様子で、カズルが恭しく一礼する。

「お呼びでございましたようか？ お方様」

「スノーモービルに、興味があるでしょうか？ あなたたちも、いつか使う可能性があるし」

ミリアーナの言葉に、カズルが苦笑する。ダイテスのオーバーテクノロジーに、カズルは多少なりとも興味を持っているのだ。

「俺たちも使うことになるんすか？」

一方のセイは首を傾げている。

ミリアーナは少し考えた後に付け加えた。

「大きいほうは使わないかもしれないけど、ソリに似たほうは可能性があるわね。まあ、実際に雪山を走るなんてことはないと思うけど」

ミリアーナから簡単な説明を受けた一行は、保管庫内に足を踏み入れた。

この場所は工場ではなく、あくまでも一時的な保管場所である。しかしメンテナンスのために様々なパーツが揃っており、組み立てを終えたばかりの雪上車も鎮座している。

その巨体を眺め、マティサは呟いた。

「ごついな。特に、下のきゃたびらだったか？ あれは車輪なのか？」

「登坂に耐える構造になっているんです。雪上車は、雪原や雪山で輸送などに使われることを前提にして作られているんですよ。スノーモービルは、また違う用途ですけど」

キヤタピラという独特の部位が気になるのか、男たちはそこばかりを覗き込んでいた。男がごつい機械を好むのは、世界共通なのだろうか。

「これが動くところとか、想像しにくいっすね」

セイが首を傾げた。確かに、キヤタピラがどう動くのかは想像しにくいだろう。

コシスも、スノーモービルを上げ上げと眺めながら言う。

「すのーもーびるは、こちらに比べれば軽そうですね。屋根がないのは、ソリだからですか？」

「そうよ。これは二、三人で乗ることを前提にしているわ」

一回は構造について一通り質問すると、満足したのか一旦離れた。

「それで嫁、なんの目的でこれを作った？」

マティサは意味ありげに笑う。

「……冬季の輸送のためですよ。雪山では大変便利なのです」

ミリアーナもにっこり笑って答えた。

「それもあるだろうが……なら、なんのために武装させている？ 冬季に使うものなら、万年雪のある場所も走れるんじゃないのか？」

「あら？ わかつちやいました？」

ミリアーナは肩をすくめた。

万年雪のある場所とは、すなわち童骨上部のこと。雪上車を使えば、そこでの活動も可能となる。マティサが偽装されている砲身に手を置いた。

「これは火薬武器だろう？ 見覚えがある」

「……用心のためです。使わないに越したことはないんですが、万が一ということもありますから。詳しい話が聞きたいのなら、明日の演習場見学が終わった後に説明します。ワイズ殿下から仕入れた情報も話しますよ。あれを見たら聞きたいことが増えるでしょうし」

ミリアーナはいたずらっぽく笑った。



童骨の中腹にある施設に一泊した後、ミリアーナ一行は裾野にある演習場まで移動した。ティスとラクスはクラリサと世話役たちに任せ、敷地内にある城で待機してもらう。

火薬武器を扱う演習場を視察の最後にしたのは、それが与える衝撃があまりにも大きいためである。

標的が置かれたただっ広い屋外の演習場で、それを目にした面々は皆、呆然としていた。

粉碎されたかのように、木っ端微塵となった標的。それだけでなく――

「……扱いやすくなつたな」

マティサは、動揺を隠しながら言った。

以前の視察でミリアーナがマティサとコシスに見せた火薬武器は、カノン砲と機関銃である。両方とも巨大で設置して使うものだったが、新作の銃器は人が持ち運びできるサイズだ。

新作の銃器には、カノン砲ほどの威力はない。しかし、圧倒的に扱いやすい。それがもたらすものに、マティサは戦慄した。

もともとミリアーナは、気軽に使えないようにするため設置型の火薬武器を作らせた。余所から攻められる恐れのない辺境では、その備えさえ充分すぎるものだったが、状況は変わったのである。「ええ、そのための新型ですから。これなら、一人が複数所持することもできます」

マティサが婿入りしてからのダイテスは、いつどこから攻められてもおかしくない状況になった。そのためミリアーナは、結婚一年目の年に、製図を終えた段階で放置していたハンドガンの類を急遽作らせた。彼女は、それを持って王都へ向かっていたのだ。

女性が護身のために持ち歩ける小さなもので、実際に使う機会はなかったが、今後の世界情勢を考え、改良を加えて密かに製造していたのが今回の銃器類である。

コシスが頭を抱えて崩れ落ちる。

「これでは……騎馬が役に立ちません。突入させれば、火器のよい餌食です」

「その通りよ。よくわかったわね」

中世では、弓と騎兵、歩兵で軍隊を構成していた。初期の頃には、戦闘の際、騎乗していた兵が馬から降り歩兵として戦っていたという。

やがて鞍が改良され馬上での戦闘が可能になると、騎馬は戦場の花形となった。騎馬突撃が戦

決着をつける。

その優位を覆したのが火器である。

中世後期に火縄銃が登場すると、戦場は一変。銃の集中射撃を食らう騎馬は、敵陣に辿り着くとさえ難しくなった。

「これを攻略するには……兵を集中させるのは逆効果だ。むしろ散開させるべきか？ 小部隊に分けて……障害物があればいいが……なければ……的をばらけさせる……多方向から同時に突入……いや、被害は免れんか……」

マティサが難しい顔をして、何やらぶつぶつと口走っている。

「婿様……すぐにそこまで辿り着く婿様の才能が怖いです」

マティサが口にした攻略方法は、ある意味正解の一つである。

天賦の才——戦闘に関わるセンスが人並み外れた人物は、ごく稀にいる。

「ただ、障害物で遮蔽するのは不可能ですよ。なんのために、セタ城の前面を空けていると思っっているんですか？ 機関銃の射程距離内なら、キルゾーンです。的をばらけさせても、機関銃の連射速度がカバーします」

外敵にまず攻撃されるセタ城の前面は、遮蔽物が一切ない開けた場所だ。

しかし、これはいわば誘い。敵がそこに集まれば、カノン砲を打ち込む。カノン砲の射程距離を越えた者には、機関銃の射撃を食らわせる。

「対策済みか」